海の道むなかた館　令和元年度
館長講座「アーカイブス　古代史の謎」第４回

令和元年７月14日(日)

海の道むなかた館長　西谷　正

楽浪遺物のある風景

Ⅰ．はじめに
　ＢＳＳ　山陰放送　平成14年（2002）11月13日放送から

Ⅱ．楽浪郡とは

Ⅲ．楽浪遺物を求めて
　古代出雲を中心に

Ⅳ．楽浪郡の遺跡発掘―ピョンヤンの遺跡と出土品
　勝利洞（旧・土城洞）木槨墓

Ⅴ．中国鏡に映る風景

Ⅵ．おわりに
　北東アジアに連動する歴史

楽浪郡の変遷　　漢四郡設置当初（前108年ごろ）

【お知らせ】
次回の館長講座は８月11日(日)13：30～(2時間程度) 講義室にて開催いたします。

覇権形成	南と北の異民族の動き
前221　始皇帝が天下を統一、秦帝国の誕生	匈奴は単于のもとに部族連合を形成
	匈奴が侵入する
周王朝の1.5倍に領土を拡大 漢民族の版図確定	秦帝国は長城を修復し匈奴の侵入にそなえる
前202　漢高祖　漢帝国をひらく 内政重視 消極的外交 地方分権的状態	匈奴は冒頓単于のもとに諸部族が結集
	漢帝国、匈奴との戦いに破れ和親を結ぶ
	漢帝国の内戦に乗じ匈奴の侵入が続く
前141　武帝即位 国家体制の強化を押し進める	

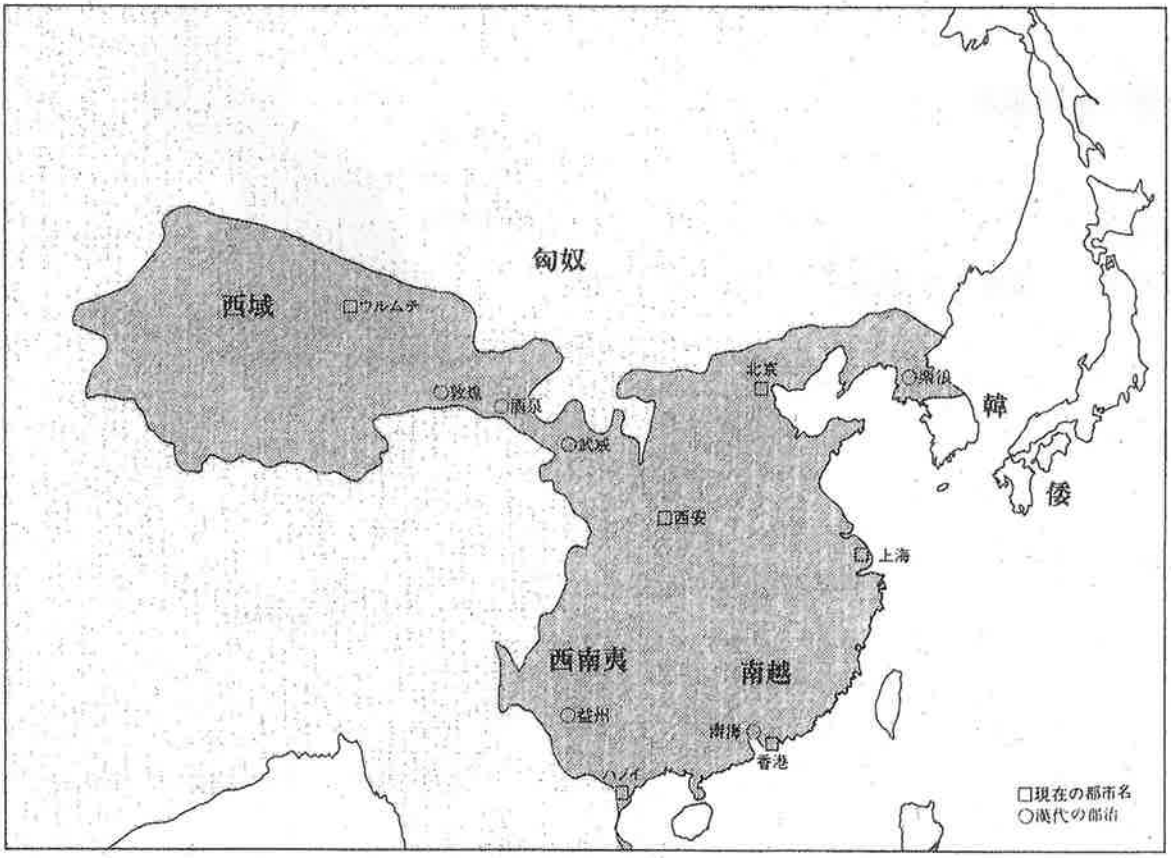
武帝の対外政策

前129～
　119　匈奴と戦闘
前121　武威・酒泉の二郡設置

前111　南越を滅ぼし南海郡等を設置
前108　衛氏を滅ぼし楽浪郡等を設置

漢帝国の対外政策

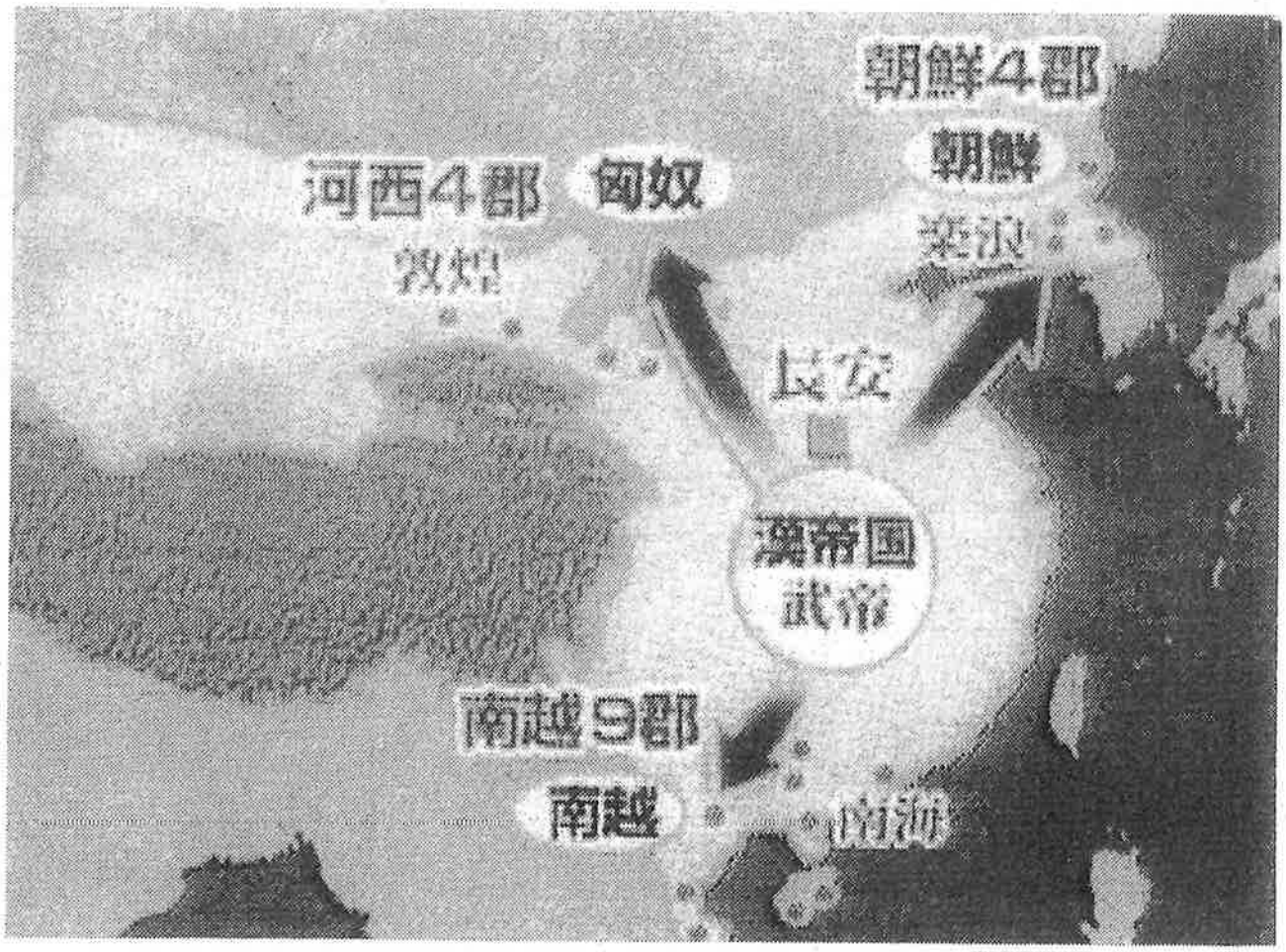
（大阪府立弥生文化博物館，1993『弥生人の見た楽浪文化』より）



漢帝国の版図と郡治の所在地

（大阪府立弥生文化博物館，1993『弥生人の見た楽浪文化』より）

前 2 世紀後半の北東アジア



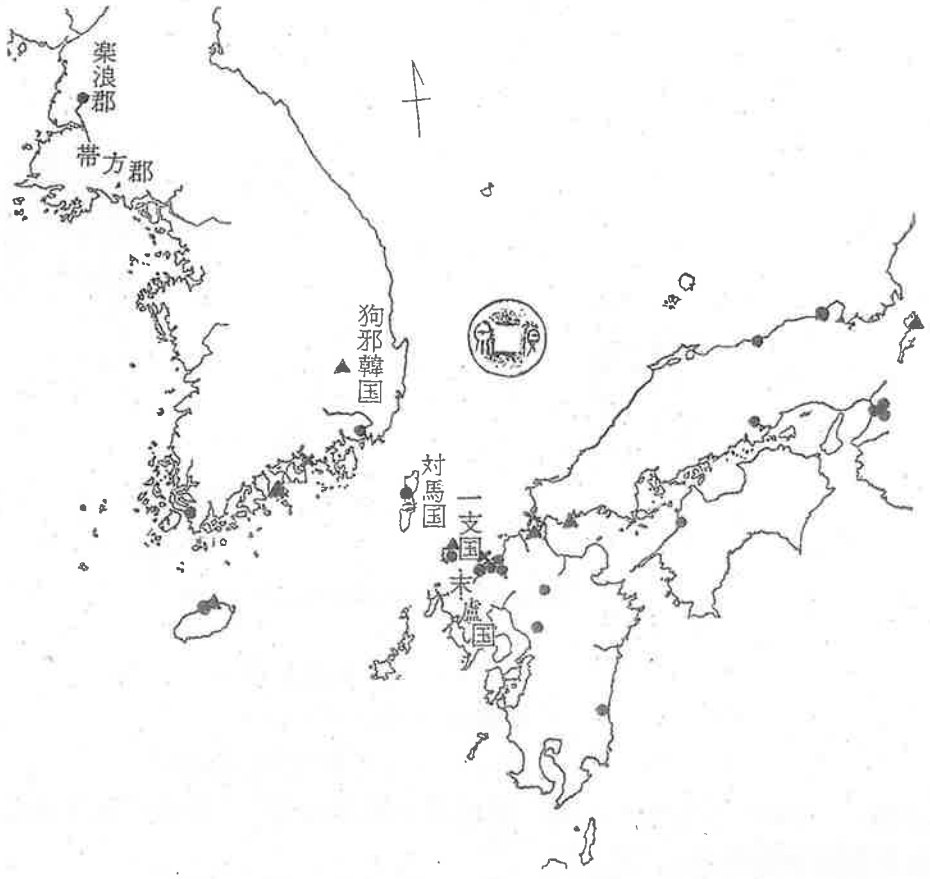
漢帝国武帝の国土拡張政策

楽浪郡の変遷　①漢四郡設置当初（前108年ごろ）

②大楽浪郡時代（前75年ごろ）

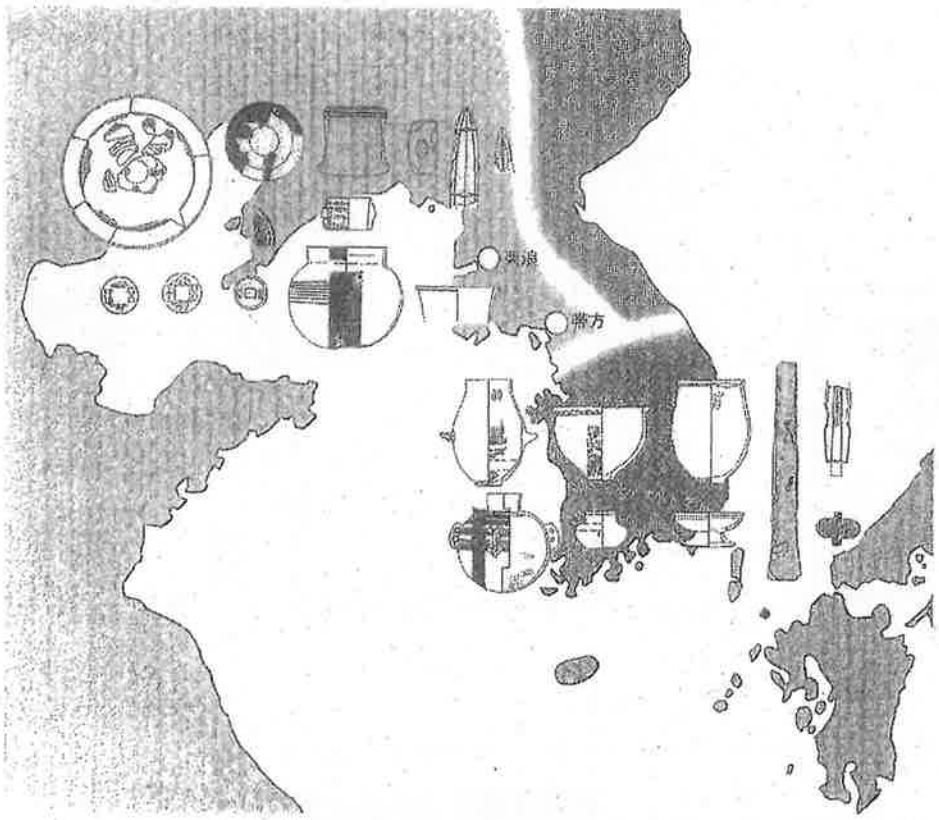
③嶺東七県放棄後（30年ごろ）

④帯方郡分置（204年ごろ）



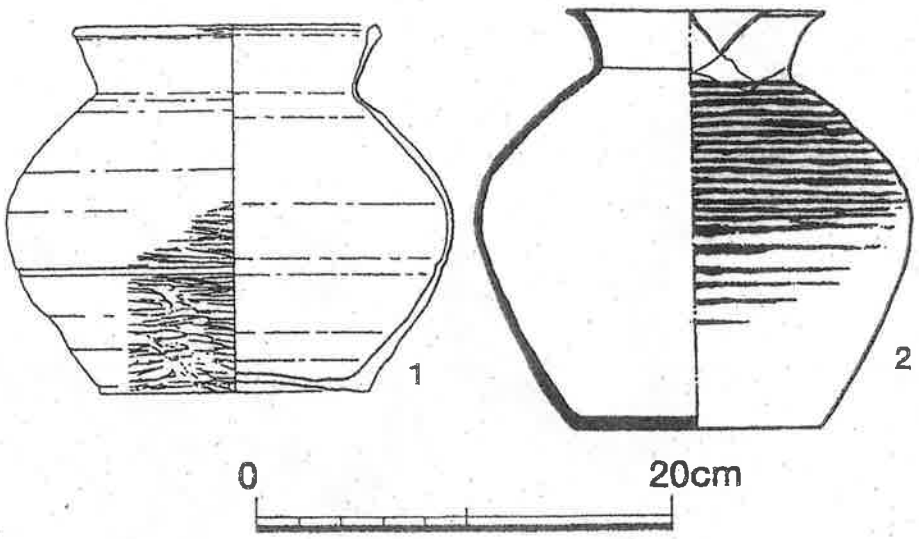
貨泉（●）五銖銭（▲）半両銭（×）出土分布図

（佐伯有清ほか，1976『邪馬台国のすべて』より一部加筆）



壱岐・原の辻遺跡にもたらされた大陸・半島の文物

（原の辻遺跡調査事務所、2002『壱岐・原の辻遺跡』より）

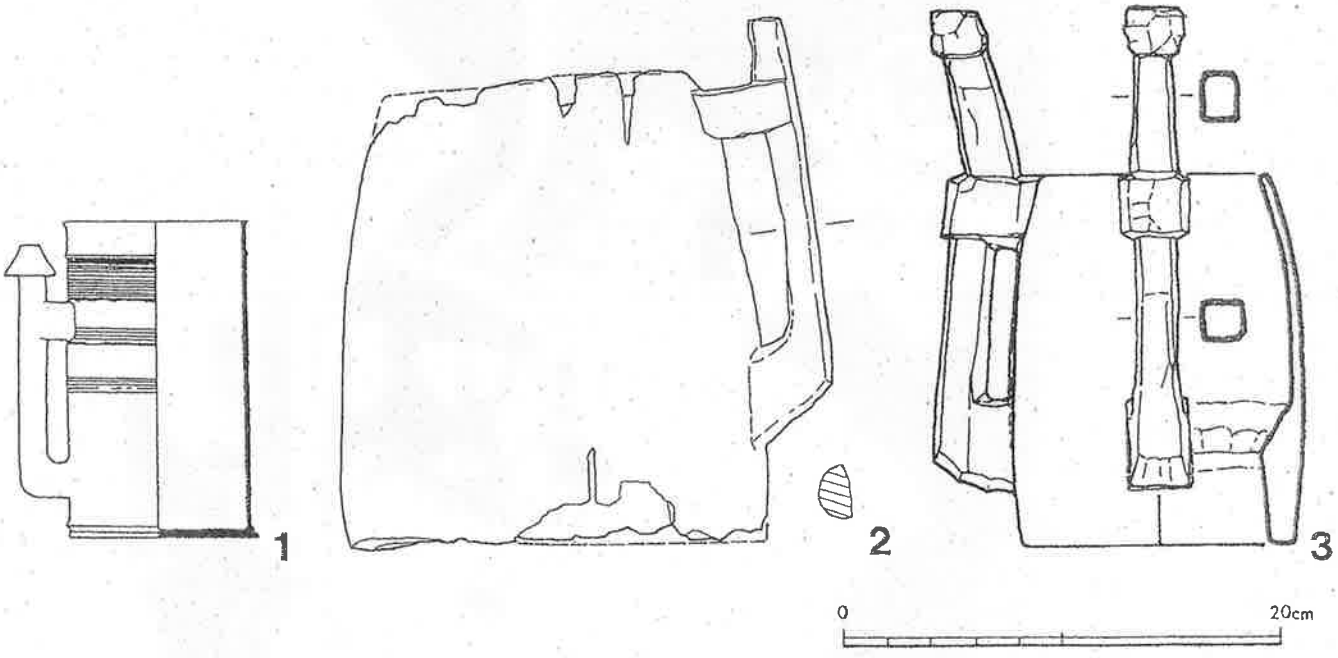


楽浪土器

1．鹿島町沖海上がり

2．ピョンヤン石巌里205号墓出土

亀田修一，2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 XII

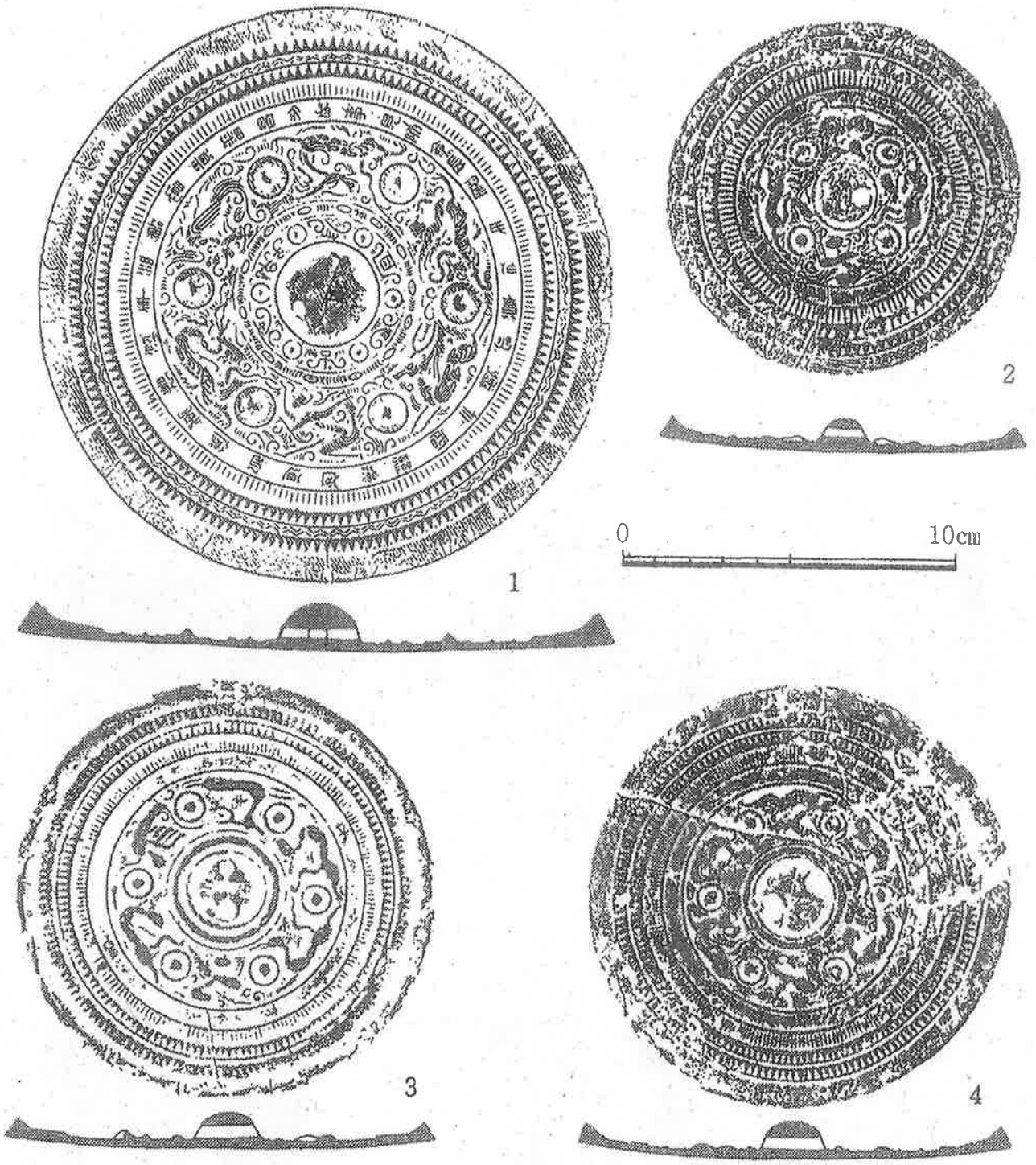


楽浪墳墓と日本出土のジョッキ形容器

1．漆器・貞柏里135号墓出土　2．木器・島根県姫原西遺跡出土

3．木器・石川県猫橋遺跡出土

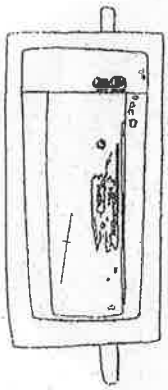
鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会，2001『日本海(東海)がつなぐ鉄の文化』



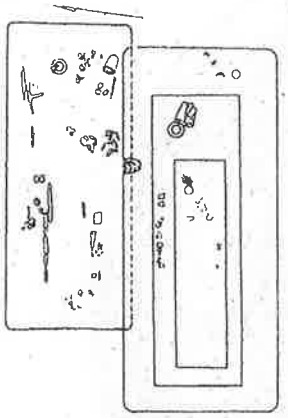
上方作系浮彫式獣帯鏡

1．六像Ａ式・ピョンヤン出土　2．四像式・鳥取県石州府29号墳出土　3．六像Ｂ式・愛知県笹ケ根１号墳出土　4．六像Ｂ式・島根県松本１号墳出土
（出雲考古学研究会，1992『出雲における古墳の出現を探る』より）

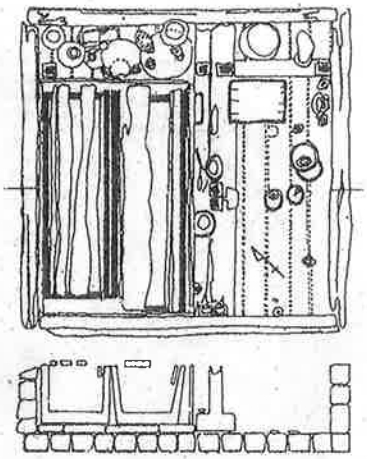
木槨墓　単人葬　　木槨墓　合葬　　槨室墓



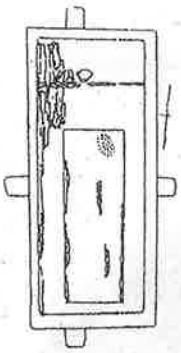
雲城里9号墓



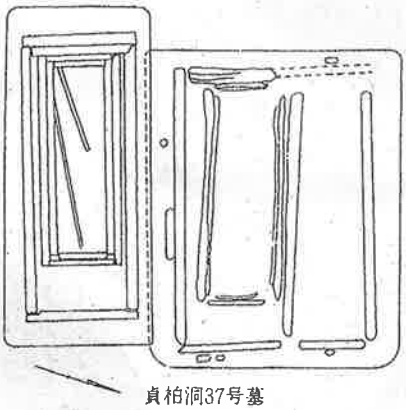
貞柏洞53号墓



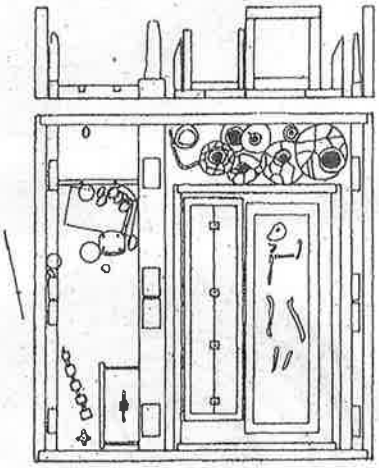
貞梧洞4号墓



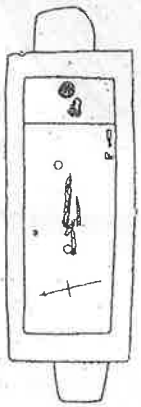
雲城里2号墓



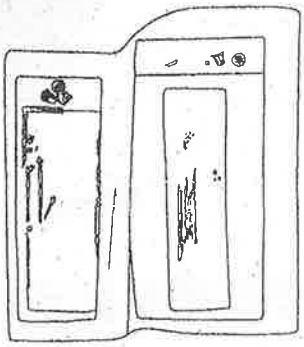
貞柏洞37号墓



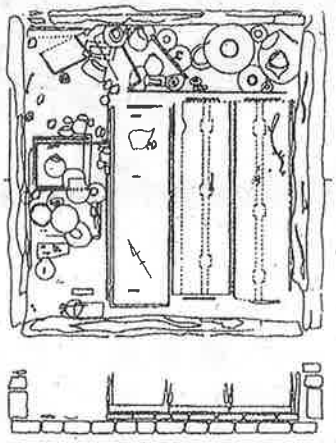
貞柏洞6号墓



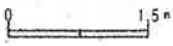
雲城里3号墓



雲城里5号墓



貞梧洞3号墓

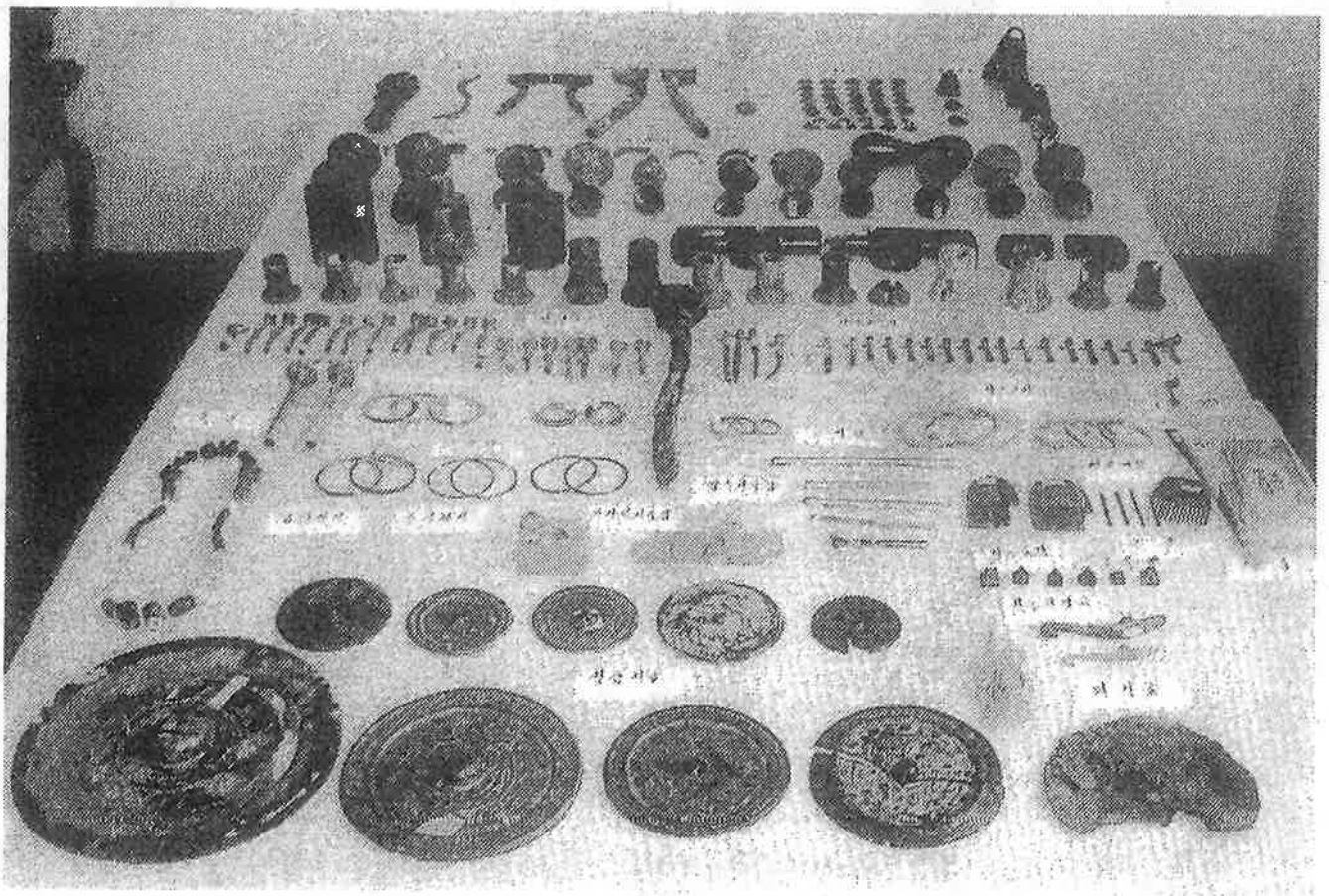


ピョンヤン付近の墳墓の棺槨図

（大阪府立弥生文化博物館，1993『弥生人の見た楽浪文化』より）

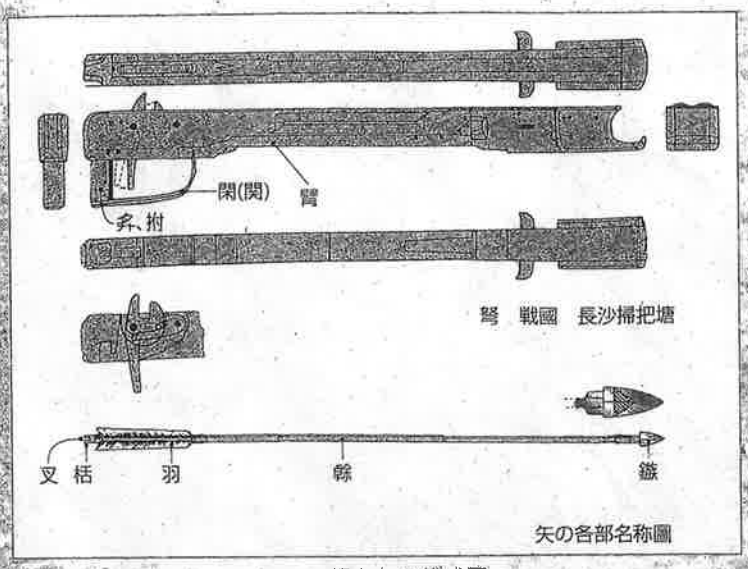
大同江南岸の楽浪郡土城跡と墳墓群

（大阪府立弥生文化博物館，1993『弥生人の見た楽浪文化』より）



ピョンヤン付近の墳墓の出土品

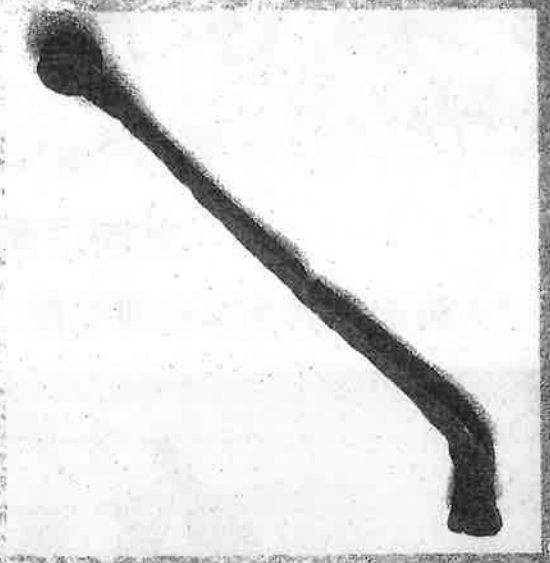
（山陰放送撮影）



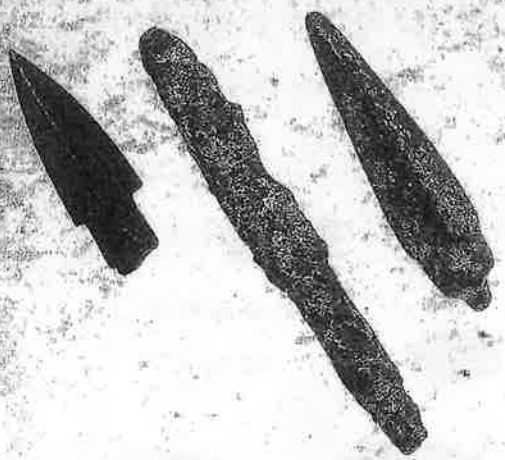
弩と矢の模式図

弩の使用例

漢式三角鏃／楽浪土城



弩形木製品／姫原西遺跡

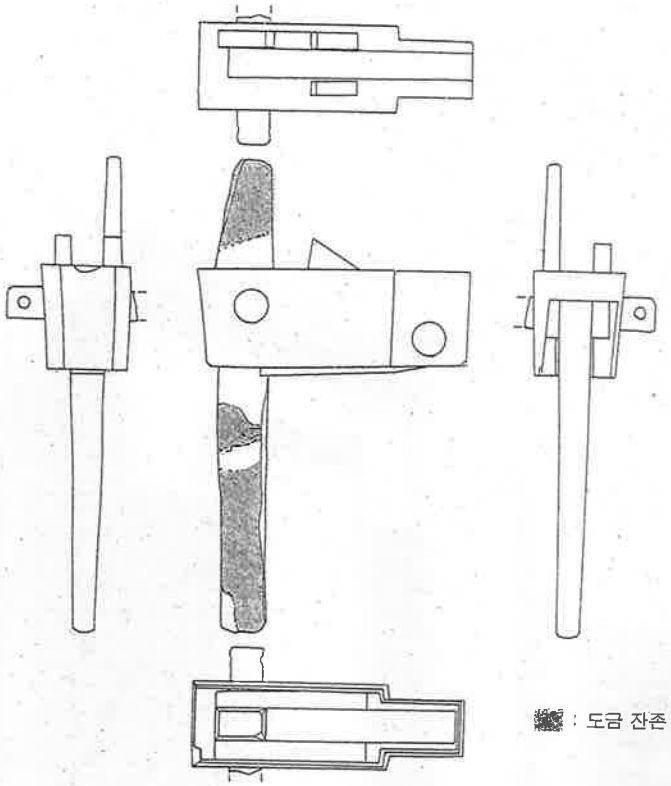


漢式三角鏃／クエゾノ遺跡

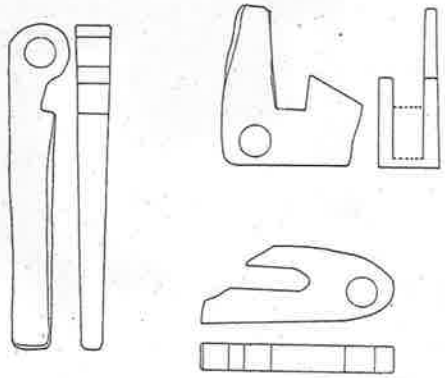
漢式三角鏃／須玖五反田遺跡

木鏃（左上）／姫原西遺跡

伊都国歴史博物館，2004『海を越えたメッセージ ～楽浪交流展～』



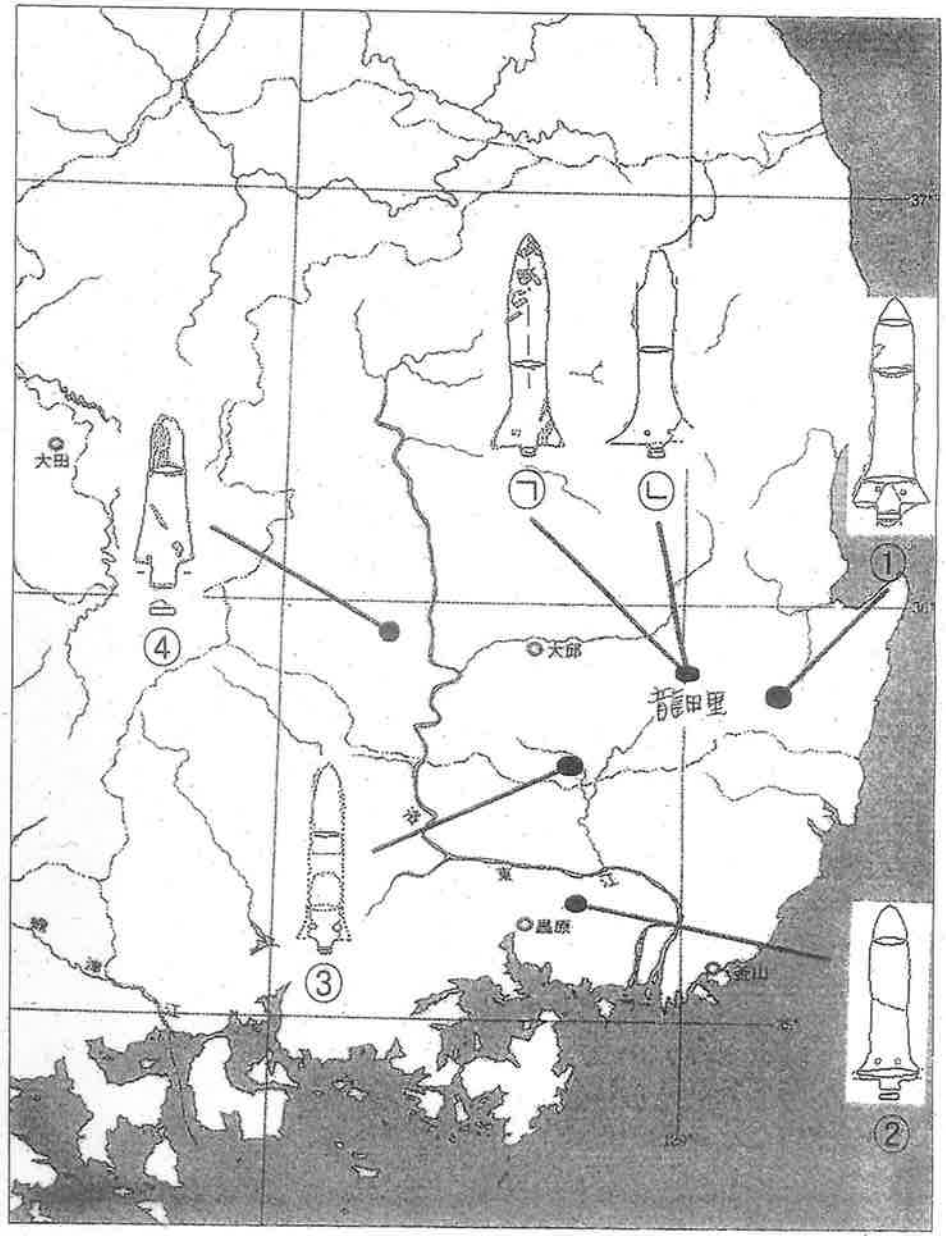
: 도금 잔존 부위

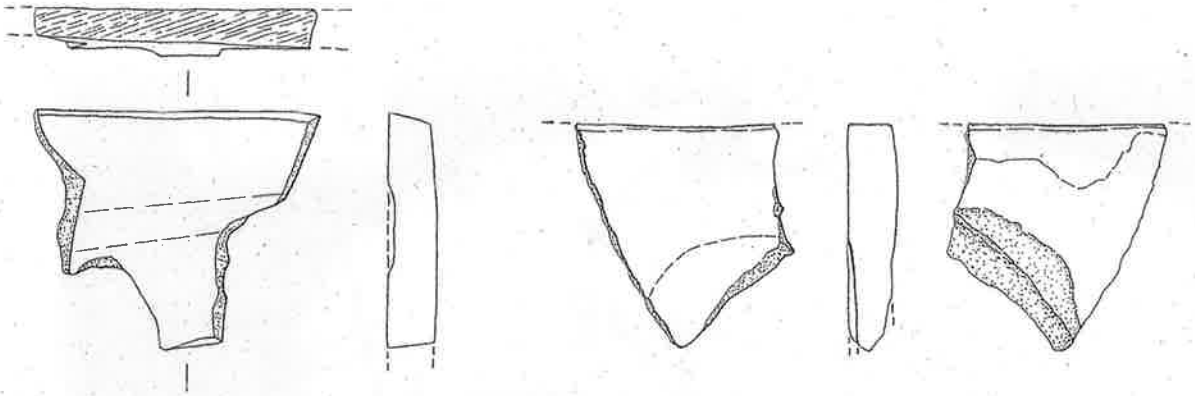


0 5cm

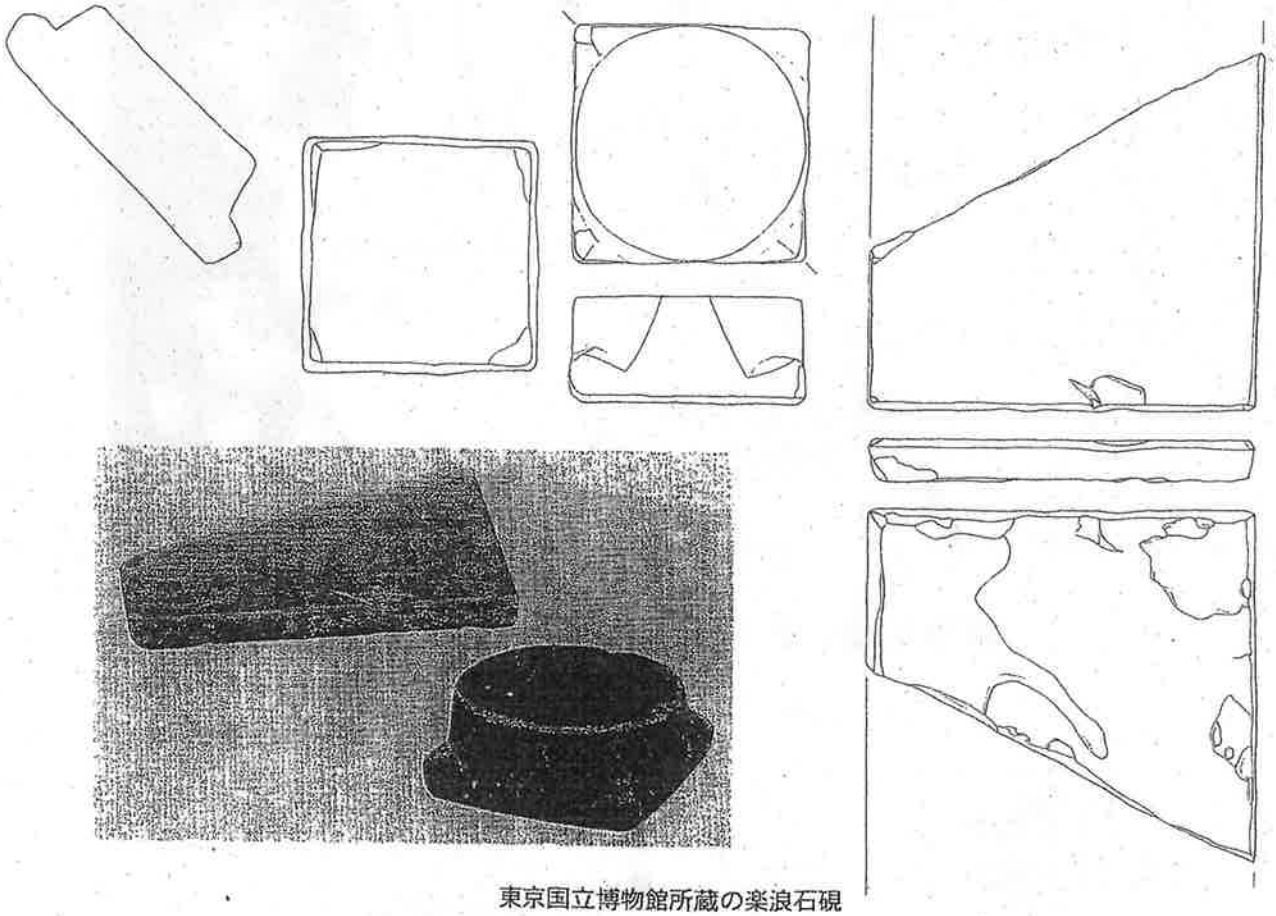
10

慶尙北道 永川市 龍田里

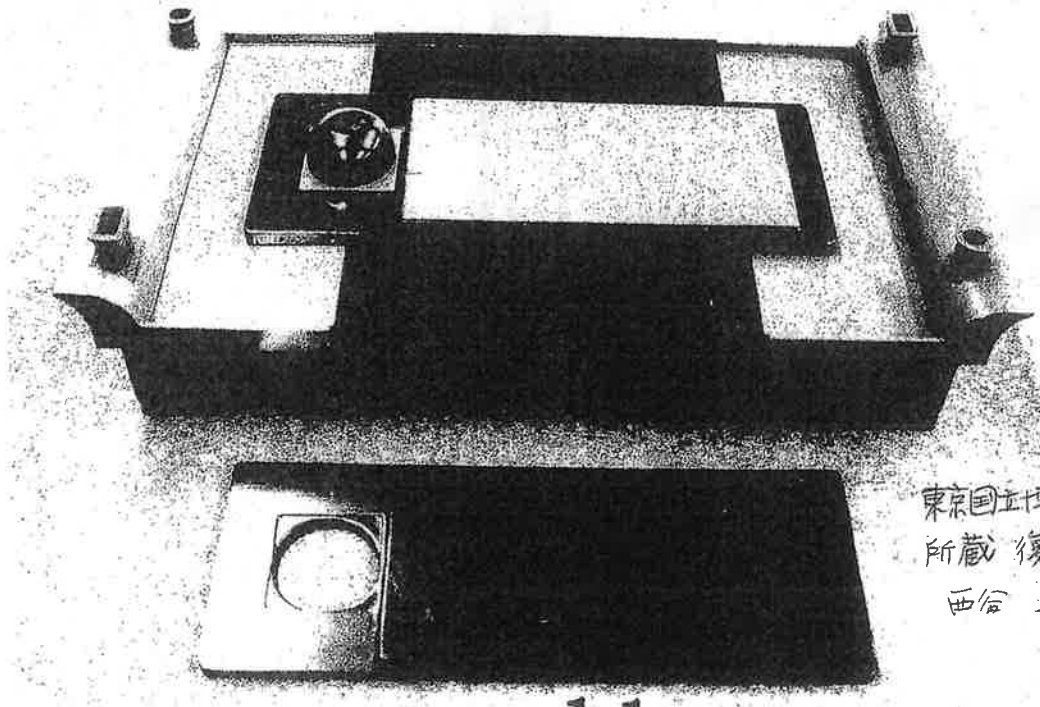




田和山遺跡で出土した楽浪石硯



東京国立博物館所蔵の楽浪石硯



東京国立博物館
所蔵 復元模型
西谷 正 撮影

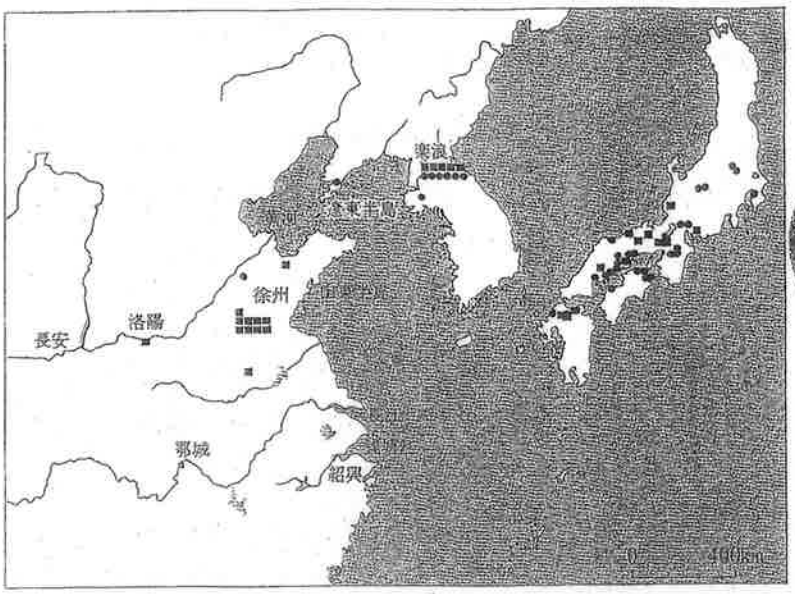


図1　華北-東部系
（■飛禽文鏡　●「上方作」系獣帯鏡）
2世紀後半～3世紀はじめ

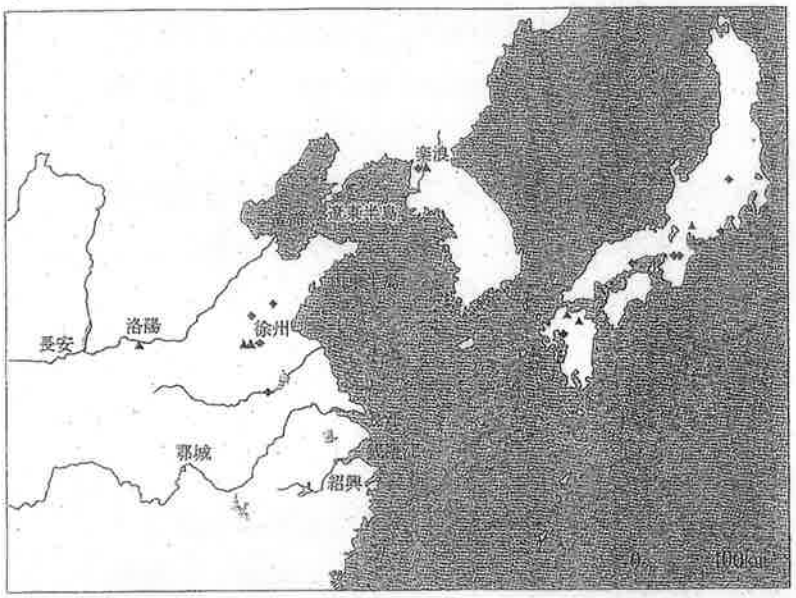


図2　華北-東部系
（▲斜縁同向式神獣鏡　◆「袁氏作」系画像鏡）
2世紀末～3世紀前半？

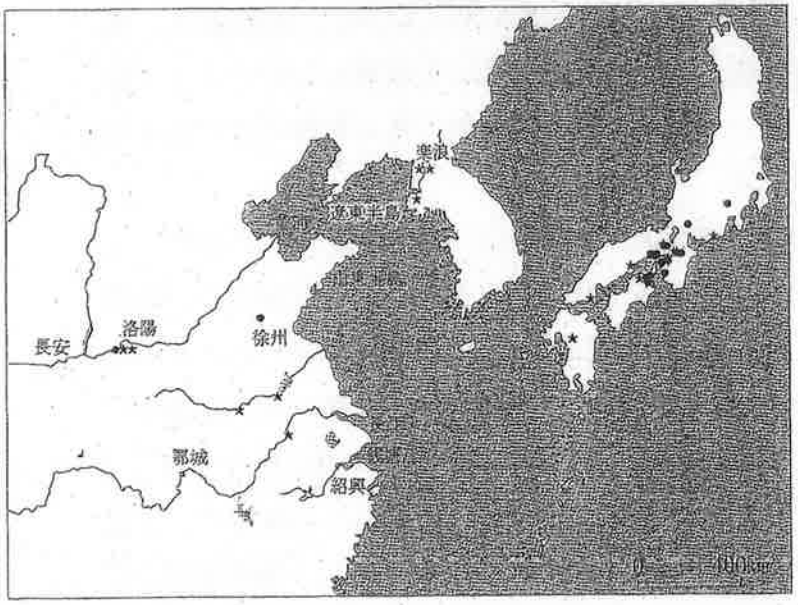


図3　華北-東部系
（●画文帯環状乳神獣鏡―上野ⅡC式　★画文帯同向式神獣鏡）
2世紀後半～3世紀はじめ

森下章司，2007「銅鏡生産の変容と交流」『考古学研究』第54巻第2号

「楽浪文化と古代出雲」

九州大学名誉教授　西谷　正

1．はじめに

いま楽浪がおもしろい。「魏志倭人伝」に登場する国々の中で唯一、その国都の遺跡として特定されている一支国(長崎県壱岐島)の原の辻遺跡では、楽浪からもたらされた文物が少なからず出土している。そして、原の辻遺跡からは、朝鮮半島南部おそらく狗邪(韓)国辺りの製品と思われる文物も出土する。さらに、原の辻遺跡には、西日本各地の土器が運び込まれているが、その中に山陰地方ことに出雲の土師器も含まれる。ちなみに、そのような土師器は、海を渡って、狗邪(韓)国に続く金官加耶国の故地でも見つかっている。(1) 古代の筑紫には、もちろん楽浪や出雲の文物がもたらされている。このような事実をつなぎ合わせてゆくと、楽浪－狗邪(韓)国・金官加耶国－一支国－筑紫－出雲という、ひとすじのラインが浮び上ってくるのではなかろうか。

2．楽浪とは

ここで楽浪とは、いうまでもなく『史記』朝鮮列伝からうかがえるように、漢の武帝が元封３年(B.C.108)、朝鮮半島の西北部に設置した楽浪郡のことである。B.C.202年に成立した漢帝国は、強大な統一国家に発展する過程で、周辺地域に領土を拡張したが、とくに北方の匈奴の勢力を牽制するために、西の西域東部と東の朝鮮半島北部を植民地化した。

楽浪郡の役所である郡治の遺跡は、朝鮮民主主義人民共和国の首都ピョンヤンの大同江南岸域に残る土城跡であり、南側一帯には無慮数千の墳墓群が分布する。墳墓の内部構造は、およそ前漢時代には木槨墓(第５図)であったが、後漢時代に入ると、塼築墓へと変遷する。墳墓からは、装身具や多種多量の副葬品が出土することでもよく知られている。

上述した原の辻遺跡出土の楽浪文物は、そのような墳墓や、土城跡の出土品と共通したものである。「魏志韓伝」によると、建安年間(A.D.196～220)には、楽浪郡の南の一部が分割されて、新たに帯方郡が設置された。その後、楽浪・帯方の二郡は、『三国史記』高句麗本紀による

と、A.D.313、4年に相次いで、高句麗によって滅ぼされた。

ところで、楽浪郡に関連して、朝鮮民主主義人民共和国の学界では、漢の武帝が設置した楽浪郡の位置は、中華人民共和国の遼東地方に比定する一方、ピョンヤン付近には馬韓すなわち楽浪国という地域国家があったと考えられている。[2] このような新しい学説に対しては、田村晃一氏が印章と封泥を取り上げて詳細に反論されている。[3]

3．楽浪と楽浪文化の意義

さて、『漢書』地理志では、はじめて倭人が登場するが、それは楽浪を介してのことである。すなわち、「楽浪(郡)の海中に倭人あり、分かれて百余の国を為し、歳時を以て来たりて献見す」という有名な一節があることから、その間の事情がうかがえる。このことは、漢帝国の郡国制度にもとづいて、楽浪郡が設置され、そして、倭人の国々が認証されたことを意味する。また、『後漢書』倭伝に見えるように、建武中元2年(A.D.57)、倭の奴国が奉貢朝賀したのに対し、時の光武帝が金印紫綬を下賜したという文献史料と、福岡市志賀島発見の「漢委奴国王」金印という考古資料を合わせ考えると、倭の奴国と、その首長が王として認証されたことをも意味する。つまり、日本列島の各地の地域社会が漢帝国の冊封体制下に入るという形で、国際社会に仲間入りしたことになる。[4] ここにおいて、倭は楽浪郡を通じて漢帝国と外交関係を結ぶとともに、国際政治の枠組の中に編入されたわけである。その後、中国の三国時代のころ、倭が、上述した帯方郡を介して魏王朝と外交関係を展開したことは、「魏志倭人伝」の重要部分を占めていることからもうかがえよう。

一方、楽浪郡の遺跡である土城跡・墳墓群の遺構と、そこからの出土遺物を見ると、楽浪郡はさながら漢帝国の植民都市の観を呈する。したがって、そこでは漢の先進的な技術や優れた文化に触れることができた。つまり、倭や倭人は、楽浪郡を通じて、いわば文明化を推進することができたといってもけっして過言ではなかろう。

4．古代出雲の中の楽浪文化

出雲における楽浪の文化を語るとき、まず第一に挙げられるのは、出雲市の姫原西遺跡で出土した中国式の弓としての弩であろう。ついで、松江市の田和山遺跡で検出された硯の研石が知られる。さらに、八束郡鹿島町沖で引き揚げられた土器[5]は、楽浪の石巌里205号墓の出土品に対比できよ

う。

そのほかでは、前出の姫原西遺跡で出土したジョッキ形をした木製容器[6]は、その独特な形態から見て、楽浪の貞柏里135号墓出土の漆器に起源が求められるであろう。　　同じ姫原西遺跡で出土している三稜木鏃は、やはりその形状の特徴からいって、出雲市古志本郷遺跡出土の楽浪の三稜銅鏃を模倣[6]したものと思われる。

最後に、出雲出土の銅鏡に触れておこう。これまで出雲で検出された中国製銅鏡はきわめて少ない。そのような状況下で、大原郡加茂町土井・砂遺跡の弥生時代終末期の墓から出土した後漢の内行花文鏡の破片[7]は、数少ない例の一つである。それに対して、4世紀後半の前方後円墳である飯石郡三刀屋町の松本1号墳出土の獣帯鏡　　が、後漢末期の2世紀後半ごろに大陸・半島より流入し、伝世した後、古墳に副葬されたと考えられる指摘[8]は興味深い。その場合、やはり楽浪からの舶載を考えるのが無難であろう。

以上のように、いまのところ、出雲における楽浪の文物なり、その影響下に生まれたと思われるものは、それほど多くない。しかし、ここで日本海沿岸部の東・西に目を向けると、たとえば一例を、貨泉・五銖銭・半両銭などの前漢から後漢にかけての貨幣の分布状況は注目される。
つまり、そのような貨幣が出雲でも発見される可能性を秘めている。また、西では山口県下関市の神田遺跡において、前漢鏡と日本で唯一の金銅製蓋弓帽が出土していて、ともに楽浪からの舶載品と考えられる。さらに、東では石川県河北郡津幡町の北中条遺跡で、弥生時代後期～古墳時代初頭ごろの木槨墓の発見[9]も伝えられる。この木槨墓が果して楽浪の木槨墓と関連するかどうかは今後の検討課題ではあるが、出雲における木槨墓の発見も視野に入れておくべきであろう。

ところで、出雲において楽浪の文化を見出すとして、そのことをどのように理解するかという問題が残っている。弥生時代中期後半から後期にかけてのころ、出雲においても、北部九州の一支国や奴国のような小国が形成された可能性について言及したことがある。すなわち、たとえば、出雲平野を中心とする簸川郡域に、正蓮寺周辺遺跡に見るような拠点集落、もっといえば国邑を中心として、一つの国の成立を想定するわけである[10]。そして、そのような小国が、楽浪郡と直接的な交渉をもった可能性もまったく否定はできない。しかし一方で、古代出雲は、筑紫すなわち北部九州と継続して交流があったので、筑紫にもたらされていた楽浪の文物を間接的に入手した可能性も考えておく必要がある。

5．おわりに

以上に述べてきたように、古代出雲の中に楽浪の文化を見出すとともに、楽浪文化の追求を今後とも引き続き行わねばならない。そのことが、古代出雲における国際化・文明化や、古代出雲と日本列島内諸地域との地域間交流などの諸課題に迫る、一つの方途にもなるからである。

注

(1) 申敬澈、2002「加耶と古代出雲」『北東アジアシリーズ報告書'01』環日本海松江国際交流会議。

(2) 社会科学院考古学研究所、1973『古朝鮮問題研究』ピョンヤン。
リ・スンジン、チャン・ジュヒョプ、1975・1976「馬韓の文化(1)～(5)」『朝鮮学術通報』第12巻第2・3・4・5－6号、第13巻第1号、東京。

(3) 田村晃一、1976「楽浪郡地域出土の印章と封泥－「馬韓の文化」への反論」『考古学雑誌』第62巻第2号。

(4) 西谷正、2002「古代出雲の国際化」『北東アジアシリーズ報告書'02』。

(5) 亀田修一、2001「出雲・石見・隠岐の朝鮮系土器－古墳時代資料を中心に－」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』XII。

(6) 池淵俊一、2001「日本海沿岸地域における弥生時代鉄器の普及－山陰地方を中心に－」『日本海(東海)がつなぐ鉄の文化』鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会。

(7) 松本岩雄氏のご教示による。

(8) 岡村秀典、1992「浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」『出雲における古墳の出現を探る』出雲考古学研究会。

(9) 石谷邦隆、2002「北中条遺跡」『平成13年度発掘速報会－よみがえる石川の遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター。

(10) 西谷正、2001「古代出雲の国際化」『北東アジアのなかの古代出雲』環日本海松江国際交流会議。

北東アジアシリーズ 2002
『楽浪文化と古代出雲』
環日本海松江国際交流会議
島根県・松江市・島根大学・山陰放送